

【研究論文】

マルチモダリティ研究の軌跡を考究する

—L. Mondadaと会話分析・相互行為言語学—

水川 喜文	社会福祉学部教授
柳町 智治	文学部教授
岡田みさを	経済学部教授

## 研究論文

マルチモダリティ研究の軌跡を考究する  
——L. Mondada と会話分析・相互行為言語学——水川 喜文 柳町 智治 岡田 みさを  
Yoshifumi MIZUKAWA Tomoharu YANAGIMACHI Misao OKADA

## 目次

1. L. Mondada の研究概観
  - 1.1 経歴と業績
  - 1.2 研究領域
2. 食料品店での客と店員による協働的サービスの開始 (Harjunpää, Mondada, & Svinhufvud. 2018)
  - 2.0 対象論文の概要
  - 2.1 考察
  - 2.2 本論文の意義
  - 2.3 小括
3. 身体を用いた返答の産出可能性 (Mondada 2021)
  - 3.0 対象論文の概要
  - 3.1 考察
  - 3.2 小括
4. おわりに

## [Abstract]

## Sketching the Trajectory of a Multimodal Study: Lorenza Mondada, Conversation Analysis and Interactional Linguistics

This review examines the central contributions of Lorenza Mondada to ethnomethodology, conversation analysis, and interactional linguistics. It introduces the major research topics of Mondada: Organization of social interaction, grammar in interaction, multimodality and multisensoriality, workplace and institutional settings, and video recordings and multimodal transcripts. We then discuss two of Mondada's papers from the perspective of conversation analysis and interactional linguistics and relate them to the reviewer's present research projects. The first paper by Harjunpää, Mondada, and Svinhufvud in 2018 investigates the multimodal aspects of encountering interactions across retail settings, including grocery stores, bakeries, and cheese shops. The findings provide a seminal reference for the reviewer's present research study on interactions, particularly those between tourists and staff at tourist information centers. We review the second paper, Mondada's (2021) study on early responses, and juxtapose it with Kuroshima's (2023) study on the relevance of this phenomenon in Japanese. The review aims to further explore and apply the insights gained from the analysis of early responses across various contexts.

## 1. L. Mondada の研究概観

本稿は、Lorenza Mondada による研究を紹介するレビュー論文である。まず最初に、公表された情報をもとに Mondada の研究を概観した後、特に (会話分析と) 相互行為言語学における Mondada の貢献について、2 つの論文を例にして考察を行う。

## 1.1. 経歴と業績

ここではまず最初に L. Mondada の研究を概観する。現在、バーゼル大学言語・文学部

の教授 (Philosophisch-Historische Fakultät, Departement Sprach-und Literaturwissenschaften) である Mondada は、エスノメソロジー、会話分析、相互行為言語学の視点から、日常的・専門的・組織的な場面における社会的相互行為の研究を行っている。特に、ビデオ分析やマルチモダリティやマルチセンソリアティに焦点を当て、言語と行為や社会関係、物体性(materiality)、感覚性(sensuality)の研究を通して言語と身体性の統合を試みている (Mondada 2024) ことで著名である。

本稿の発端としては、2023年7月4日から

キーワード：マルチモダリティ、会話分析、相互行為言語学  
Key words: multimodality; conversation analysis; interactional linguistics

7日にかけて北星学園大学で開催された L. Mondada によるワークショップであり、本講はそのワークショップの成果を含めて、Mondada の研究の一端を紹介するという意味も持っている。

このワークショップでは、我々主催者や参加者の意向を汲むことによって、次の内容で実施された。

#### Part One: Introducing Multimodal Challenges

##### 1.1 Multimodal CA (discussion)

##### 1.2. Consequence for sequentiality (presentation)

##### 1.3. An example (hands on exercise)

#### Part Two: Approaching Materiality

##### 2.1. A distinctive approach to materiality (presentation)

##### 2.2. An example: Joint action (collective analysis)

#### Part Three: Systematizing and Complexifying Multimodal Analysis

##### 3.1. Introduction: Building collections in CA while keeping the complexity of actions, ecologies and participation (introduction and discussion)

##### 3.2. Discussion of a collection (collective analysis)

このワークショップは、Mondada のキーワードであるマルチモダリティを基本概念として、フィールドワークに基づく豊富なデータを提示しながら、基礎的な用語の確認から、最新の論文の研究成果まで含まれ対話的に実施された。

次に、L. Mondada の略歴と代表的な論文・著書を紹介する<sup>(1)</sup>。Mondada はスイスのロカルノ (イタリア語圏) に生まれ、1982年から1986年までフribourg大学 (University

of Fribourg) で学んだ後、ローザンヌ、フribourg、ヌーシャテルの大学で研究助手を務めた。1991年から1992年までパリの EHESS (フランス国立社会科学高等研究院) に所属し、1994年にローザンヌ大学から博士号 (Ph. D.) を授与されている。1996年から2001年まで准教授としてバーゼル大学のロマンス語学部にも所属し、バーゼル大学で言語学の大学教授資格 (Habilitation in linguistics) を得て、2001年から2011年までリヨン第二大学の言語学部で教授を務めた。2012年から現在まで、バーゼル大学の言語学・文学部で教授となっている。その間、2015年から2017年にかけてヘルシンキ大学の間主観性研究センター (Centre of Excellence on Intersubjectivity) の特別教授となった。ヨーロッパ国内に限らず、アジア、南米の大学にも招聘され、講義、ワークショップ、講演を行い、共同研究を実施している。

研究業績に関しては、次の通り驚異的数字を示している。L. Mondada の公式サイトによれば2021年末の時点で、査読論文は172本、共著の章は181本、編著や学術誌特集の編集は36冊、単著・共著は8冊となっている。これらは量的な膨大さを示しているが、同時に、質的、研究史的な重要性のある多様な研究があることも注目すべきである。本稿では、この多様性と重要性をもとに全体像を探ることはひとまずおいて、まずは公開されたさまざまな情報を元に、その研究の概観を描写していきたいと考える。

次に、これらをふまえて Google Scholar によりながら業績を紹介する<sup>(2)</sup>。Mondada の被引用総数は24389件、h-index は77、i10 index は277である。2018年以來では、引用12643件、h-index 53、i10 index 182となっている。この h-index とは、2005年に提案された、論文の質 (被引用数) と量 (論文数) の両方を考慮した指標で、定義としては、「発表した論文のうち、被引用数が h 回以上ある

論文がh本以上ある場合、これを満たす数値hがその研究者のh-indexとなる」である<sup>(3)</sup>。考案者のE. Hirshが提起した当時は、(米国)大学教授で18, 卓越した研究者が40, 極めて独創的研究者が60と想定していた。もちろん研究分野や年代によって大きな差はあるが、日本国内の言語系の研究者では、活躍していても一桁という場合もありうる。一方で、i10 indexは、被引用数が10本以上の論文数を示している。

ちなみに、同領域である会話分析研究者のなかで、研究の質量とも最も多いと目される一人(アメリカ西海岸の著名教授)を例にとると、h-indexが50, i10 indexが70となっている。これ自体もかなり卓越した業績の質と量を数字的に示すものであるが、Mondadaの数字はこれを上回る。また、アメリカで博士号を取得し、国際誌への著作が多数ある日本の大学に所属の会話分析者3名については、同サイトにおいて、氏名別の統計が確認できたものは一人であった。その人については、被引用数224, h-index 6, i10 index 3となっている。これらからも、Mondadaの数字がいかにか驚異的かがよくわかる。

Mondadaの論文のうち、被引用数の多い論文をしてみる。最も多い767本に引用されたのは、次の論文である。

Mondada, L. and Doehler, S. 2005, Second language acquisition as situated practice: Task accomplishment in the French second language classroom, *Canadian Modern Language Review* 61 (4), 461-490.

これは、第二言語習得と状況の実践についての論文であり、マルチモダリティの研究を中心に据える前に、学校の教室を含めたさまざまなフィールドで相互行為研究を行っていたこともわかる。

次に、753本の被引用数があったのは、下記である。

Mondada, L. 2007, Multimodal resources for

turn-taking: Pointing and the emergence of possible next speakers, *Discourse Studies* 9 (2), 194-225

この論文は、C. Goodwin以来、会話分析では常識となった指差し(pointing)の議論をマルチモダリティ的な資源に展開したという意味で、会話分析という領域にとって重要な論文となっている。

続く709本の被引用数は、次の論文である。  
Mondada, L. 2018, Multiple temporalities of language and body in interaction: Challenges for transcribing multimodality, *Research on Language and Social Interaction* 51 (1), 85-106

この論文は、出版年が2018年と比較的浅いにもかかわらず被引用数は、700本を超えている。言語学や社会学に限らず、相互行為の研究にとって、会話だけでなく身体動作を含めて「マルチモーダルに」映像データを録画して、分析していくということはもはや常識となっているが、どのような方法論を持ってして、そのトランスクリプトを作成するかという点は非常に悩ましい課題である。本論文は、この点について具体的な提案をしているものである。以上、外在的ではあるがMondadaの研究業績の一端を紹介した。

## 1.2 研究領域

ここでは、公式ウェブサイトの「Research Topics」の記述から主な研究を紹介する(注1の1を参照。ICARにも同様の記述あり)。その研究は、(1)社会的相互行為の組織化、(2)相互行為における文法、(3)マルチモダリティとマルチセンソリアリティ、(4)ワークプレイスと制度的状況、(5)ビデオ録画とマルチモーダルなトランスクリプトに分けられている。

まず、(1)の「社会的相互行為の組織化」においては、研究対象が「相互行為の組織化(the organization of interaction)」にあると

明記され、これは自然に生起する (naturally occurring) 社会的実践をビデオや音声で記録することを通してなされるとしている。ここでは、研究対象としての設定が、いわゆる実験状況ではないことが述べられていることに注意すべきである。日常的な食事、車のナビゲーション、マーケットでの購買場面から、外科手術など専門的な知識による社会実践を、自然に生起するものとして捉えて分析する視点が示されている。また予め設定された実験状況についても、状況付けられ自然に生起するものとして捉える視点がみてとれる。

これらの研究方法としては、会話分析、エスノメソドロジー、相互行為言語学、ワークプレイス研究があげられている。E. Shegloff や J. Heritage などによって研究分野として確立され膨大な研究者が生み出された会話分析ではあるが、そのアイデアの源泉となったエスノメソドロジーを研究方法の一つとしてあげる研究者はそれほど多くない。Mondada が、影響力のある論文で「エスノメソドロジーに発想を得た (インスパイアされた) 会話分析」と述べる時、その特別な含意を理解する必要がある。Mondada は、マルチモダリティの研究者として会話分析の学会内で一定の位置づけを持っているが、それだけではなく、その知的源泉であるエスノメソドロジーを参照しているという点でも特別な位置にあるといってもよいであろう。また、ワークプレイス研究を言及する会話分析研究者もそれほど多くない。ワークプレイス研究は、(ゼロックス) パロアルト研究所に所属していた人類学者の L. Suchman やキングズ・カレッジ・ロンドンの C. Heath と P. Luff らが嚆矢となり、エスノメソドロジー研究を CSCW など共同作業の研究に応用することを試みたものである。社会学的視点が必要となるため、言語学がベースとなる会話分析研究者の中で参照されにくい傾向にある。このワークプレイス研究と会話分析によるマルチ

モダリティ研究の融合が、Mondada の研究の特徴の一つともいえる。

Mondada がサックスの発想に従って紹介する際の特徴といえるのが、シークエンスの組織化と成員カテゴリー化 (membership categorization) の組織化の両者を考慮するという点である。シークエンスの組織化は、会話分析の主たる関心事といってよいが、成員カテゴリー化装置 (membership categorization device) を言及する会話分析者もそれほど多くない。多くの会話分析者にとって、教師であることや生徒であることは、言語実践の前提であって、研究者あるいは、調査の当事者にとって対象 (となる現象) ではない。その点で、Mondada にとっては、成員カテゴリー自体が、その実践の中でいかに成し遂げられるかという課題があるという意味でエスノメソドロジー的な研究となっている。

(2) の「相互行為における文法」の記述では、自己を「社会的相互行為を研究する言語学者」して、会話分析と相互行為言語学 (interactional linguistics) で開発されたアプローチを用いていると述べている。ここでは文法を書き言葉を中心に探求するのではなく、相互行為資源として、社会実践の中でどのようにその場その場に応じて用いられているかという視点を持って考察している。社会的相互行為を「自然の生息地 (natural habitat)」と捉えて、相互行為の中で文法がどのように使われるかだけでなく、文法がどのように変化しているかも研究対象としている。さらには、社会的相互行為を、言語的リソースだけではなく、身体的リソースも利用する点を考慮して、トークというものをマルチモーダルの、状況的、時間とシークエンスで組織化された概念として展開することをめざしているとしている。

ここで注意すべきは、相互行為言語学という分析視点について、E. Ochs らに言及する場合を除いて、「会話分析と相互行為言語

学」というように、ほとんどすべてにおいて会話分析とセットで分析的視点として言及している点である<sup>(3)</sup>。これはすなわち、Mondadaにおいては、相互行為言語学を単独で分析視点とするというより、会話分析あるいは、エスノメソドロジ的な会話分析 (ethnomethodologically inspired conversation analysis) と共にする形で分析的視点にしているということを示しているようである。このセクションで、言語的リソースを扱う場合も「moment by moment(その時々)」 「contingencies(偶発的/偶然の)」「reflexively adjusted (相互反映的に調整された)」といった、(エスノメソドロジと) 会話分析の用語系を用いているところからもそのことは理解できる。

(3) の「マルチモダリティとマルチセンソリアリティ」では、ビデオ機器の普及した後に、社会実践や相互行為におけるトーク (talk in interaction) の研究の方向性についての、マルチモダリティに焦点を当てている。ここでいうマルチモーダルな資源とは、ジェスチャー、視線、身体表現、頭の動き、身体の姿勢のことを指している。マルチモーダルな資源については、上記だけではなく、相互行為の中で、物質的な対象、ドキュメント、技術的人工物をどのように扱っていくかという視点も必要となる。これらによって、テキストの読み書き、地図や絵を見ること、コンピューターなど人工物を利用することなど、さまざまなフィールドにいざなわれることになる。

さらには、Mondada は近年、味覚や聴覚のテイスティング、触覚などをめぐるマルチモーダルな組織化や間主観的な達成に関して、「マルチセンソリアリティ」という名のもとで研究をすすめている。マルチモダリティに関する FiDiPro のプロジェクト (Multimodality: Reconsidering Language and Action through Embodiment, 2015-2017) から始まり、SNF プロジェクト (From

Multimodality to Multisensoriality: Language, Body, and Sensoriality in Social Interaction, 2018-2023) などに引き継がれている。

(4) の「ワークプレイスと制度的状況」の研究では、さまざまなフィールドワークによって、専門的な設定の研究や日常的作業や相互行為の記録までを扱われる。フィールドとしては、手術、麻酔科、精神科など医療的な環境はもとより、作業中 (working) における科学研究室、建築家や農学、企業の会議、顧客優先サービス、コールセンター、店のやり取りなども含まれる。

国際的な作業環境の研究を通して、制度的・集合的活動の組織化における複数言語という資源に関する課題が提起されている。

(5) の「ビデオ録画とマルチモーダルなトランスクリプト」で焦点に当てられるのは、フィールドワークや調査によって得た音声データ、ビデオデータをどのように分析可能なデータにしていくかという課題である。これらは、研究の基盤としてのデータを提供するという意味では、その手法の確立が重要であることは言うまでもない。Mondada はそこにとどまらず、そのフィールドワークを行い、調査許可を得て、データをデジタル化して、トランスクリプトにすること自体を、発見を共有する方法とみることによって、社会的実践として研究対象とする考え方を持っている。これらは、マルチモーダルなトランスクリプトを作成することにより、社会的相互行為におけるさまざまな身体化された行為を扱うための慣習を開発することと同時に探求されている。

本節では、Mondada の公式ホームページなど公開された情報をもとにして、その研究の一端を紹介した。ここで研究課題とされていた5つの領域については、相互に重なり合い影響し合うことによって Mondada の膨大な研究の方向性を示しているのである。

(水川喜文)

## 2. 食料品店での客と店員による協働のサービスの開始 (Harjunpää, Mondada, & Svinhufvud. 2018)

### 2.0 対象論文の概要

・Harjunpää, K., L. Mondada, & K. Svinhufvud (2018). The coordinated entry into service encounters in food shops: Managing interactional space, availability, and service during openings. *Research on Language and Social Interaction*, 51 (3), 271-291.

「食料品店におけるサービスの協働的開始：開始部における相互行為スペース、可用性、接客の管理」

・対象論文の目的：Harjunpää らによる研究（以下、「本論文」と呼ぶ）は、ヨーロッパの食料品店における店員と顧客による会話という制度的場面において、顧客に対するサービスが開始されるまでの相互行為的実践を、実際のビデオデータの微視的分析を通して明らかにすることを目的としている。

・方法：会話の開始部については、これまでも Conversation Analysis (CA, 会話分析) の研究領域において分析対象と扱われてきており、特に Schegloff (1968, 1979) による電話会話冒頭部の研究はよく知られている。しかし、電話会話の研究が音声データのみを扱ったのに対し、本論文は録画した映像をデータとして用いることにより、参加者の発話だけでなく、客による入り口からカウンターへの移動、店員の客への接近といった空間的移動、あるいは相手や店内の人工物への視線、身体の向きや姿勢などの embodiment (身体化) の分析を通して、サービスが開始されるまでの過程を multimodality (マルチモダリティ) の視点から分析している。

・データとフィールド：ヨーロッパ15か国のキオスクや食料品を扱う店舗において複数の据え置きビデオカメラによって録画録音され

た店員と顧客のやりとりの場面が本研究グループのデータベースを構成している。本論文では特に、以上のデータベースから、店舗のレイアウトや扱われている商品が類似している調査地を選別した結果、スペインのバルセロナ、スイスのバーゼル、フィンランドのヘルシンキ、エスポー、そしてヴァーサの計5都市にあるパン屋とチーズ店で収録されたデータを分析の対象としている。さらに、分析に用いられる抜粋は筆者の一人である Lorenza Mondada 氏によって開発された、マルチモーダル分析が可能となる文字化システム (Mondada 2018a) によって転記されている。

### 2.1 考察

店舗において顧客サービスが開始されるまでの諸相を本論文の筆者らが分析する中で中心的な役割を果たしている概念が service point である。これは店舗空間、参加者の身体そして会話の連鎖を通して組織される、顧客による最初のリクエストが適切となる位置のことを指す。顧客が店舗の入り口から店内のカウンターに向けて移動し、その間に店員との間で互いに視線や挨拶がやりとりされ、最終的に service point に至る。この点に到達するまでの過程が客と店員によってどう管理され組織化されているのか、それをビデオデータの映像と文字化データの精緻な分析を通して明らかにするのが本論文の目的である。

以上の点から参加者の振る舞いを記述を行うにあたり、筆者らはデータ群を大きく二つのケースに分けて分析する。一つは、店員が客の来店に当初から気づき、自らの availability (可用性) を表示して顧客を迎え、遅滞なく service point に至るケースであり、もう一つは、客の来店時に店員が別の作業に携わっている等の理由により可用性が制限されているケースである。この場合、店員による対応はすぐにはなされず、service point へ

の進行にも滞りが生じることになる。以下では、これら二つのケースのそれぞれについて筆者らの分析と考察を検討していくことにする。

まず、前者のケースに属する事例として、本論文ではスイスのチーズ店での会話事例をとり挙げ分析している。店員は店舗の窓越しに外にいる客に気づき、客が店に入る前の段階で身体を入り口の方に向ける。そのことにより客は入店すると同時に、接客の準備ができていた状態の店員に志向する。そこで両者は互いに視線を合わせ、ほぼ同時に挨拶を交わす<sup>(4)</sup>。この後、客が店内のカウンターに向けて進むのに合わせて店員もカウンターの内側を客の方に移動し、お互いは歩み寄っていく。客がカウンター前で体の向きを変えて再び店員を見ると、店員は自身の両手をカウンターの上で重ね、客にフルに対応できる状態であることを表示する。こうして service point に到達すると、客はある種類のチーズがほしいことを店員に伝える。

以上の例、そして論文中の他の類事例の分析を通して提示されているのは、最大限の可用性というものが客の入店前からそちらに志向している店員によってさまざまな実践を通して体系的に達成されているという事実である。さらに、顧客と店員は相手の様子を絶えずモニターし、互いの視線を確保し、双方への歩み寄りを調整する。そしてサービスが開始されるポイントが導かれ、客が食品を買い求めるという行為が可能となる。このように、サービスの開始が顧客と店員の両者によって協働的になされる相互行為であることが示唆される。

他方、二つ目のケースとしてこの論文が検討しているのが、客が店を訪れた時に店員が店の奥で作業していたり他の客の対応をしているために可用性に制限があるような場合である。このような時、客と店員は即時に接客可能な店員が不在である問題を service point

への進行を互いに調整し合うことで管理する。たとえば、客が入店するも店員が棚の中にある商品を整理していて背を向けた状態になっていたり、カウンターの上に置かれた書類の情報を指で追いながら読んでいる事例が示される。店員がこのように multiactivity（複数の活動、Haddington, Keisanen, Mondada, & Nevile 2014）に従事している時、客は店員が今何に志向し、どのように自らの（不）可用性を表示しているのかに合わせ、それでもサービスが開始されるように進行を継続させたり、逆に、店内の商品に目をやるなどして進行を遅らせたりする。それを見た店員の側も、一度客に向けた視線をそれまでの作業の方に戻したりする。両者によるこの時の視線は、単に相手から視線をはずしたということではなく、むしろ何を買うべきか決める、あるいは店舗運営に関連した作業を継続するといった、サービス開始部への進行に関連したことに向けられている点は重要である。サービスを開始するのか、あるいはこの制度的文脈ではあり得る、店舗内の作業のために時間をとるのかという競合する選択肢の間で客と店員は交渉し調整を行う。参与者の視点の動きはその時に現れる身体化の中でも特に重要なものと言える。

さらに、以上で紹介した二種類のケースの例外的事例として、客と店員による挨拶（英語での“hello”や“hi”に相当する表現）の交換が不完全なために、両者による相互行為への参加の調整がうまくいかず、あらためて挨拶の交換が行われるケース（double greetings）についても考察が行われている。本論文中の抜粋では、最初の挨拶のやりとりの際に、サービスの開始には非常に重要な要素である客と店員の視線の一致が実現せず、両者がサービスへの導入の遅れを同じ間合いで管理できなくなる様子が示される。このような場合、客は最初の挨拶を会話の進行には不十分なものとして取り扱い、再度店員に向



けて挨拶を行う。これによって店員に対して service point への進行を促すのである<sup>(5)</sup>。本論文によれば、double greetings は多言語話者間の会話冒頭部においてどの言語で会話するかの交渉を行う時に使われる (Mondada 2018b) など、種々の実践的場面において相互行為を再スタートさせる際に参加者が用いることがわかっている。

## 2.2 本論文の意義

以上で示してきたように、客が店舗に足を踏み入れた時点から店員と客の双方は相手の様子を詳細にモニターし、それに合わせて自らの振る舞いを適切に調整する。この協働的な営みを通してサービスの開始点に到達することができる。Harjunpää らによる本論文は、この点を実際の購入場面のビデオデータの検討を通して経験的に導き出していた。そして、この研究の最も大きな貢献は、従来の研究によって十分に検討されていなかった、サービス開始部における組織化の問題をマルチモダリティおよび制度的会話という二つの視点からそれぞれ取り扱った点にあると言える。

まず前者に関して、筆者らも述べているように CA の領域において会話の開始部がマルチモーダルな視点から分析されるようになったのは近年になってからのことであり、対面での人々の encounter (出会い) の探究は言語的要素だけでなく、身体的要素やそれらの実践が置かれる活動の文脈・環境との関係において行われていく必要性を筆者らは強調する。当該論文のデータで言えば、顧客と店員の視線、カウンターの内と外での移動と停止、身体の向きや姿勢といった身体的要素も分析に含めることによって、参加者が協働的にサービスの開始部に進行していく様が記述可能となっていた。そしてこのことは同時に、service point への到達は顧客と店員のやりとりで先立って存在する既与のものではなく、むしろ参加者同士の絶え間ない交渉と調整を

通して達成される相互行為の実践であることを示している。

さらに、本論文のもう一つの意義は、当該文脈における institutionality (制度性) の側面にも目を向けている点にあるだろう。著者らによれば、店員によって示される可用性もしくは不可可用性は、顧客への対応がすぐに可能となるかという点に関連して、顧客と店員の権利と義務の問題につながっているという。データ中の店員は自らの可用性を公的にすることで、顧客への迅速なサービスを優先し顧客に対する店員としての義務に対応しようとしていた。一方で、店舗内で来店客への対応以外の作業に従事している場合には、自らの不可可用性を表示し、このケースでは客の側もカウンターに向かう歩みを遅したり店内の商品に目をやるなど、service point の達成のタイミングを遅らせていた。こうして店員の作業は legitimate (正統) な、店員のワークの一部として両者により協働的に構成され、引き続きそちらに従事する権利を店員に与えていたのである。

店員の可用性と不可可用性は、会話の局面局面で顧客とローカルに交渉され、顧客が店員の主張を受け入れ service point への進行の遅れに合わせるのか、あるいは客として滞りなくサービスを受ける権利を主張するのが、さらに店員による次の応答と調整につながっていた。このように、店員の (不) 可用性はサービスの開始点に至るまでの過程で参加者がどのように相互行為への参加を調整するかという点と関連していたのである。

## 2.3 小括

今回、本稿執筆者の柳町が Harjunpää らによる本論文をレビューの対象としたのは、そこで扱われている事象が柳町が取り組んでいる二つの研究テーマと密接に関連しているためである。一つ目のテーマは、日本国内の観光案内所のカウンターを訪れた国内外の観

光客と案内所スタッフによる会話開始部の分析であり、もう一つは、中学生を対象とした個別指導学習塾において、複数の生徒の間を巡回指導する教師の注意を生徒がどのように獲得し自らの質問を教師に向けて行うのかに関する分析である。これらの研究テーマは共に制度的場面における会話の開始部を扱っている。案内所に足を踏み入れた観光客がカウンターのスタッフに見所や交通に関する質問を発する会話連鎖上の位置、あるいは教師の注意を得た生徒が教師に質問や確認を行う位置、つまり本論文で言うところの service point に至るまでの過程を明らかにすることが研究の目的となっている。この点で本論文中の分析と考察は大いに参考となる。

一方で、観光案内所あるいは個別指導学習塾での参加者の相互行為を、本論文のマルチモーダルな分析手法、参加者の(不)可用性、権利と義務という概念も参照しながら分析すると、本論文のチーズ店などと比較すると、案内所と学習塾の場合、それらの空間的配置と参加者の移動の有無(店舗・案内所 vs. 教室)、交換されるもの(商品 vs. 知識・情報)、参加者の関係性(初対面 vs. 旧知)、関係の持続性(一回のみ vs. 継続的)、代金・料金の発生の有無(有料 vs. 無料)などそれぞれに考慮すべき点もある。その意味で、観光案内所あるいは学習塾で見られる相互行為の検討は制度的場面におけるサービスや教授の開始部に関する、より一般的な理解につながる可能性があるだろう。

(柳町智治)

### 3. 身体を用いた返答の早期産出可能性 (Mondada 2021)

#### 3.0 対象論文の概要

・Mondada, L. (2021) How early can embodied responses be?: Issues in time and sequentiality, *Discourse Processes*, 58 (4)

: 397-418. doi: 10.1080/0163853X. 2020. 1871561

「身体を用いた返答はどの程度早く産出可能か?: 時間と連鎖の問題」

・対象論文の目的: 本論文のタイトルにある「early responses」とは「返答されるターン・行為がまだ進行中に、そのターン・行為に対する返答が創出され進行すること」(Deppermann, Mondada and Pekarek Doehler 2021: 293)を指す。

Mondada (2021)の目的は、「その場で即座に行う行為を依頼する→依頼された行為をその場その時に行う」(Mondada 2021: 400)という隣接ペア (Schegloff and Sacks 1973)の連鎖の中で、身体による early responses が行われる環境を詳細に調べ、マイクロな時間で起こる連鎖の中で、何がその early responses を可能にしているかを論じていることである (Mondada 2021: 401, Deppermann et al. 2021: 294)。

この early responses 現象は国際学術誌 *Discourse Processes* (出版社: Routledge)において、Deppermann, Mondada and Pekarek Doehler を編者として、2021年に特集号が出版されたテーマであり、この節で紹介する Mondada (2021) も特集号収録論文の1つである。特集号「イントロダクション」において、編者である Deppermann et al. (2021: 294)は、会話分析や相互行為言語学では、従来(お互いの行為の「間主観的理解」(Heritage 1984: 259)を達成する際の)<sup>(6)</sup>

「時間軸の中で行われる参加者による行為のコーディネーション」が研究されてきたが、ここで焦点化する「early responses」現象については未だ研究が少なく、どのような環境でこの現象がよく起こるのかを精査する必要があると指摘している (Deppermann et al. 2021: 294)。さらに、この「お互いの行為の組織化」は、話者の、瞬間瞬間に変わりゆく

現在の行為の様相の時間軸だけでなく、その行為がこれからどう展開するのかを予測し、それに返答することを可能にする「予測可能性 (projectability)」にも、基づいたものであることが強調されている (Mondada 2021: 397)。この視点に基づき、特集号では、最初の行為の中の「何 (例: turn-initial particles, turn-initial syntax, 語順, 身体動作, 環境の中の要素など)」が、(early responses を生み出す) 早期の予測を可能にし、(返答者による) それらのリソース使用がどのように観察可能になっているかを詳細に検討する (Deppermann et al. 2021: 302)。この問いの観点から、Mondada (2021) では、(参加者が志向している) 身体動作 (指差しなど)、触覚、及び局所的な環境の要素 (Mondada 2021: 412) などが、early responses 創出につながっている例が分析されている。この章では、特に「身体動作 (指差しなど)」と「触覚」による事例 2 つを取りあげて紹介する。

・方法: この論文でも、Mondada の他の論文と同様、会話参加者の行為の詳細な「ビデオ分析」が用いられている。「参加者の行為の時間的組織化」(‘temporal arrangement of the participants’ actions’ (Mondada 2021: 401) の 1 つである early responses 現象を詳細に見ていくのに「ビデオ分析」は必要不可欠であると考えられる。Mondada 自身、同論文で使われているビデオ分析は、「行為がそれに付随する偶発的出来事(contingencies)を明らかにしながら進行する際の、それを取り巻くモノや空間の環境を捉えることが可能になる点で有用である」と述べている (Mondada 2021: 401)。また、言語の詳細のみならず、身体動作等の起点や完結点を記録するためのトランスクリプトの存在も忘れてはならない (Mondada 2021: 398, Mondada が考案したトランスクリプトの Multimodal 分析における有用性については Mondada 2018a 参照)。

Mondada (2021) で用いられている下記の概念<sup>1) 2)</sup> は、特集号の「イントロダクション」論文で以下の通り定義されている (Deppermann et al. 2021: 295-299)。

#### 1) 予測 (projection and anticipation)

予測可能性 (Projection) という会話分析で用いられている概念について、特集号では「ある行為が、その行為の継続や将来の行為を予測できること」(Deppermann et al. 2021: 294) とし、さらに「私たちが自分の行為を『project』する」、「私たちが、他の参加者の行為を『anticipate』する」と区別した言葉を用いている。さらに、これら行為の予測 (projection/anticipation) を可能にするさまざまなレベルの資源 (例: 文法資源、音声資源、身体動作による資源等) がこの特集号イントロダクションではリストされている (Deppermann et al. 2021: 295-299)。

#### 2) 連鎖 (sequentiality)

特集号イントロダクションでは、連鎖 (sequentiality) は、「どのようにある行為に対する返答が起こり、さらにその返答が、進行中の最初の行為にどのような影響を与えるか、という連続した、ステップを踏んだ協働行為の創出」を指す (Deppermann et al. 2021: 294)。ここで示されている連鎖概念、例えば、定義後半の部分の「ある行為に対する相手の返答が、進行中の最初の行為の発出形式に影響を与える」という視点は、紹介者の見解では、従来の会話分析の先行研究に見られるものである。例えば、ターン産出途中で、相手の視線が自分に向けられていないことを受けて、最初の話者が産出途中の語末の母音の伸ばしや、語の繰り返し等を行なって、創出中の発話の進行を遅らせる例 (e.g. Goodwin 1981 など) や、相手の不十分な返答を受けて、最初の行為の話者が自分のターン末に句や節による文法的延長 (phrasal or clausal extensions) を行なって、相手のより

適切な返答を促す例などがこれまでも報告されている (e. g. M. H. Goodwin 1980, Ford & Mori 1994, 横森 2018など)。この early response 特集号の連鎖(sequentiality)概念も、これらの先行研究と同じ視点の流れの中にあると考えられる。

一方、ここで、より新しいことは、Mondada (2021: 398) では、ここで定義されている連鎖 (sequentiality) 概念と、身体動作によって構成されている会話で起こる early responses の関連について ‘sequentially ordered simultaneities’ という概念で発展させていることである。この概念についての Mondada(2021: 398)の主張の要約は概略、以下の通りである：

身体的相互行為 (embodied interaction) を見た時、重なりがないことに志向される言語形式のリソースとは異なり、身体のリソース、例えば視線の動きと上体の捻りの動きは同時に起こる場合があることに気づく。しかしこれらリソースの起点や終了点はそれぞれ異なっており、また (ある一瞬をみると) 同時に起こってはいても、それらのリソースは実は連鎖の中で捉えることが肝要である。例えば、early response では定義で述べた通り、まだ最初のターン・行為が発出されている最中に、それに対する返答が起こる。これらのターン・行為を作るリソースは、ある瞬間を見ると同時に起こっているように見えるが、「誰が最初の行為を始め、誰がその行為に返答を行っているのか」、など、上記に定義した「連鎖」で見えていくべきである。そして、最初の行為が何で、それに対する返答が何か、さらにそれを明らかにするリソースは何で、それが他のリソースや行為とどのような関係を持って発出されるかを注視すべきである。言語に基づいて見た会話では、返答はそのターン末付近でなされることが先行研究では述べられているが、これに対して、身体動作によって構成されている会話での early

responses 現象では、返答者が「その行為が何であるかが明らかになった時点」で返答が始まる (Mondada 2021: 398)<sup>(7)</sup>。その様相を ‘sequentially ordered simultaneities’ という視点で理解することが肝要であるという (以上, Mondada 2021: 398より引用および要約)。この ‘sequentially ordered simultaneities’ 概念 (Mondada 2018a) については、下記の分析事例で例示する。

・データとフィールド：本論文で分析されているのは、すべてフランス語による会話データであり、冒頭で示される early response 現象の代表的な事例を示した「観光ガイド」場面のほか、1) キオスク、ベーカリーなどの様々な店舗での購買場面、2) 美術館で芸術作品を協働して運搬する場面、3) アマチュアレーシングドライバーへのコーチによる指導場面が取り上げられている (Mondada 2021: 401)。

・分析 この節で最初に紹介するのは、early response 現象の代表的な事例を示した「観光ガイド場面」である。ここでは、ガイドが、彼を囲んでいる数人の観光客に対して、そこから離れた場所にいる青い蝶を見るよう勧めている場面である。このデータでは、マルチモーダル分析を行うことにより (early response が起こっていることのみならず)、同時に起こっている言語や身体動作のリソースが、実は行為の連鎖に基づいて組織化されているという、前述の ‘sequentially ordered simultaneities’ (Mondada 2021: 398) 概念 (上記「方法論」節を参照) を観察することができる、と Mondada は述べる (Mondada 2021: 400)。

ここでは、まず、ガイドの発話 (英語訳 ‘look at the: . hhh the blue butterfly there’) が、自らの足を蝶の方向に出して身体を前に動かすという全身の動きと共に起こって、その動きの延長線上にある彼の指先が彼の全身をさ

らに拡張し、指さし行為に対して最大限の視認性を発揮できる形態がとられていることが指摘される。Mondada はここで彼の指さし動作は、単に(何かを)指し示す‘co-speech gesture’というだけでなく、その指が身体全体の動きの一部として使われていると述べる(Mondada 2021: 400)。このような考え方を反映し、トランスクリプトには「指さしの準備動作の起点」(紹介者が考えるにおそらく手が上がる時点と思われる)から、「指さしそのものが始まる点」や「前に出る足の動き」も含め、それがこの発話の途中のどの部分と重なっているかまでが詳細に書き起こされている。また、トランスクリプトでは、その指示に反応した early responses として、数人の観光客の各々が、この指示発話‘look at the: .hhh the blue butterfly there’が終わるまでの、どの語の時点で、蝶を見る身体動作をとって返答を行うのか、について詳細に書き起こされる(例えば、ある者は the の直前で、またある者は .hhh でその身体動作をとる)。さらに、観光ガイドが、観光客全員からの返答(蝶を見ること)が起こることに志向して、シラブルの引き延ばし(the:), 吸気(.hhh), the の繰り返し(the: .hhh the butterfly)によって、自分の発話ターンを引き伸ばしていることが指摘される(Mondada 2021: 400)。言い換えると、上述した「sequentiality 概念」定義の後半部分の観点より、観光ガイドの第 1 行為(蝶を見るよう指示する=‘first action’)は、相手である観光客の出方(見る=第 2 行為‘second action’)に応じて、その進行が調整されていると Mondada (2021: 400)は指摘する。ここで表現されるお互いの、「連鎖」の中での調整について、Mondada は‘micro-sequentiality’ (Mondada 2018a) という用語で説明する(Mondada 2021: 400)。全員がこの蝶を見るやいなや、ガイドは、蝶の種類を述べる次の発話‘it’s an argus. see?’を創出する、という(Mondada 2021: 400)。

以上の分析事例について、上述した‘sequentially ordered simultaneities’概念の観点からは、Mondada (2021: 400)は、次のように解説する：各々の観光客による第 2 行為(複数のタイミングで上記発話中に起こる返答-蝶を見ること)はガイドの第 1 行為(指示)の途中で起こっている、という点で、これらの行為は「同時に」起こっている。しかし同時に起こっているこれらの行為は以下の点から、「発話連鎖の中で組織化」されている：1) 第 2 行為は第 1 行為への返答として起こっている、2) 第 2 行為を反映して、進行中の第 1 行為(の言語形式)が調整されている。このように、この冒頭の例で、Mondada は、同時に起こっている第 1 行為と第 2 行為、またそれらの行為を形作っている様々なリソースが、実はマイクロな「連鎖」の中で起こっていることを示し、‘sequentially ordered simultaneities’概念を例示する(Mondada 2021: 400)。

2番目に紹介する事例では、どのようなリソースが返答者による「現在進行中の第 1 行為の予測」を可能にしているかについて、その 1 つのリソースとして「触覚」が分析されている。前述の 1 つ目の例では第 1 行為の話者の「身体の動き」などがリソースとなって第 2 話者が early response を行う例が分析されているが、この 2 つ目の例では、「触って感じること」によって、第 2 行為が第 1 行為の発話中に early response として創出されること、また、その相手による第 2 行為が、第 1 行為の話者の「ターン発話部分 (go come out)」の開始部分(命令形 go)の「発出中」に創出されている様相が示される(Mondada 2021: 409, Mondada 2018a も参照)。この例のフィールドは美術館で、三人の参加者がチームで大きな芸術作品を運ぼうとしている場面である。まず、そのうちのチームリーダーが、‘we will turn it straight’と言って、‘it’でその作品に言及し、それを運ぶことが

次にすべき行為であることをアナウンスする (Mondada 2021: 409)。そして、このリーダーは、‘yeah.’と言った後、次の発話‘go’が始まる前に作品を運ぶ身体動作を始める。その動作を受けて、(作品に触れていると画像から読み取れる)他のメンバーも、リーダーが作品を動かしたことを自分の触覚によって感知し、命令形 go の「発出中」に自分も一緒にそれを運ぶ。まとめると、この返答者は、最初のリーダーのアナウンスによって、これからすべきことはこの作品を動かすことである、と予測し、また自らの触覚を通じて、指示された行為(作品を運ぶこと)を行うことができた (Mondada 2021: 410)。第1行為のターンの発話途中で early response が起こった前の例に対して、この例では、言葉によるリーダーの指示表現(‘go’)が始まったばかりというタイミングで、言語資源(アナウンス)及び触覚により、返答者は指示された行為を行うのである。

### 3.1 考察

この節で紹介してきた early response 現象は、日本語サービス会話における依頼行為を分析した Kuroshima (2023) で応用され、early response が起こった「後」も続いている、第1行為 (first action) のターン末の日本語の丁寧さのスタンスを示す述語末表現が、ターン前半で構築された「店員が客に依頼し、客が従うこと」で起こる ‘deontic asymmetry’ に対して、それを調整する (adjust) 役割を持っていることが示されている。‘Deontic authority’ は Stevanovic and Peräkylä (2012) により、「他者の将来の行為を決める権利」(Stevanovic & Peräkylä 2012: 297) と定義されている。Kuroshima (2023) の冒頭の例では、店員が客に書類記入を依頼する場面で、店員は、ペンを客の方に押しやりながら、「ここお名前と：あの、この、連絡先のお電話番号：」と、「お

電話番号」の最後のシラブルを伸ばす。「この」に重なって、客は「はい」と言いつつ手を前に動かすことにより、early response を予告する。「お電話番号：」と最後のシラブルを伸ばして文の進行を遅らせることにより、店員は、客のペンの方に手を伸ばす行為が間欠を入れず行われ、書類記入ができるような空間を創出する、と言う (Kuroshima 2023: 116-117)。ペンに手を伸ばしそれを掴んだ客が指示に従う書く姿勢をとった時点で、まだ指示のターンは続いており、店員は「お願いいたしま：：す」と謙譲の述語表現を使ってこのターンを終える。客の従う行為が始まった後であっても、店員は、進行中のターンを「述語が最後にくる日本語の文法」で完結する際に、その述語末に、謙譲表現「お願いいたします」といった‘関係を完成する構成要素 (relational completion components)’ (Tanaka 1999) を用いている (Kuroshima 2023: 117)。つまり、この例では、まず「店員」が「客」に書類の記入を依頼し客はそれに従うので、この二人の間には「指示する店員>それに従う客」という ‘deontic asymmetry’ が構築される。しかし、この early response の後でもこの文は進行し、依頼ターン末の日本語の丁寧な述語末表現「お願いいたします」は、依頼-従うで作られた [deontic asymmetry] のある人間関係(「店員>客」)を、「臨時的に」「(恩恵を受ける)店員 (a beneficiary) <恩恵を与える客 (a benefactor)」と調整する役割を持っている、と Kuroshima (2023: 117) は指摘する。このように Kuroshima (2023) は early response 現象で述語が最後に置かれる日本語の事例を分析することにより、early response の後も続く(第1行為の)依頼ターンを日本語文法の語順の観点から分析した。そして、音調(「継続イントネーションや音の伸ばし」)やフィルターによって作られる、日本語の「sub-units」(Iwasaki 2015) 構造により、返答者の early

responses が可能となり、さらに指示を出す者が述語末の形式（「関係を完成する構成要素」）を決めることも可能になる、という考察に至った (Kuroshima 2023: 117)。Early response 現象の分析が日本語文法を研究する相互行為言語学及び日本語サービス会話における依頼行為の研究に与えた新しい展開と言える。

### 3.2 小括

特集号イントロダクション論文の開始部分で述べられているように、「時間軸概念 (temporality) は人間の経験や行為の創出や解釈の基本的特徴(‘a core feature’)であり」、「言語構造や相互行為は time object である」という (Deppermann et al. 2021: 293)。この「temporality」という観点から、言語創出や理解を考察した「心理言語学」などの他分野では、例えば‘information processing’など、「認知プロセス」の観点より temporality を分析してきた (Deppermann et al. 2021: 293)。これに対して、会話分析や相互行為言語学では、この節の最初に述べたように、「相互行為の協働」を達成する temporality の「間主観的側面」に焦点化している (Deppermann et al. 2021: 294)。さらに、Mondada (2021) がまとめるように相互行為を見た会話分析における「依頼行為の先行研究」では、「依頼への返答」の‘temporal arrangement of the participants’ actions’について、従来、例えば「preference versus dispreference (いくつかの返答の仕方が考えられる中で、ある返答が前の参加者の期待にどの程度沿っているかのランキングを問う (Sidnell 2010: 77)」の観点から「遅れた返答」などについて研究がなされてきたが (Mondada 2021: 401)、Mondada (2021) は、参加者の行為 (返答) の時間的組織化に影響するのはそれだけではなく、他にも「(依頼への) 返答の即時性が求められる場合」(Mondada 2018c) など、

参加者の返答の時間的組織化には様々な側面があると指摘する (Mondada 2021: 401)。Mondada (2021) ではこのような参加者の返答の時間的組織化の一環として、「early responses」を取り上げた (Mondada 2021: 400-401より要約)。

この節では、Mondada (2021) で分析されている「early responses」現象について、同特集号の编者によるイントロダクション (Deppermann et al. 2021) なども引用しながら、これらの著者が述べる「early responses」現象を分析する意義について著者 Mondada の知見を紹介した。また日本語会話分析における「early responses」現象の応用可能性について Kuroshima (2023) を紹介した。今後とも様々な側面でこの「early responses」現象の分析は、応用及び拡張されることが予想される (Okada in preparation)。

(岡田みさを)

## 4. おわりに

本稿では、L. Mondada の研究を概観するために、Google Scholar など公開された情報をもとに外在的に追っていくという方策をとった。そのうえで、(会話分析と) 相互行為言語学の視点から、Harjunpää, Mondada, & Svinhufvud (2018), Mondada (2021) をとりあげて、Mondada の研究と学問的研究の一端を示した。これによって Mondada による卓越した研究が一片でも示すことができ、その研究の理解と応用可能性を提示するための第一歩となることができれば幸いである。

### 〔謝辞〕

本稿執筆の契機となったのは Lorenza Mondada 教授を講師として招聘した北星学園大学でのワークショップであった。主催者である本稿執筆者3名は同教授にかねてより大変お世話に

なっている。特に、岡田と柳町は2017年度に1年間の国外研修を行っており、その時には同教授が招聘されていたヘルシンキ大学に半年間、そして、本籍のバーゼル大学に半年間滞在し、数多くの研究会や大学院講義に参加させていただいた。長年にわたり、さまざまな研究上の援助、アドバイスをしてくださっている Mondada 教授に対し感謝の意を表したい。

- ・本研究は、2023年度北星学園大学特定研究による研究である。
- ・本研究は JSPS 科研費22K01881の助成を受けたものです。

## 注

(1) 主として以下を参照した。

1) Lorenza Mondada (<https://www.lorenzamondada.net/about>)

Research Topics (<https://www.lorenzamondada.net/research-topics>)

2) Freiburg Institute for Advanced Studies Albeit-Ludwig-Universität Freiburg

([https://www.frias.uni-freiburg.de/de/das-institut/archiv-frias/school-of-lili/fellows/mondada\\_lili](https://www.frias.uni-freiburg.de/de/das-institut/archiv-frias/school-of-lili/fellows/mondada_lili))

3) Lorenza Mondada, Professor of Linguistics, ICAR (<https://www.ens-lyon.fr/en/research/honors-and-awards/lorenza-mondada-professor-linguistics-icar>)

ICAR : Interactions, Corpus, Apprenti-ssages, Représentations

4) Lorenza Mondada (UMR ICR)

<http://www.icar.cnrs.fr/pageperso/lorenza/english/bio.htm>

本稿の参照する Web サイトは、特にことわりのない限り2023年10月20日閲覧とする。

(2) Lorenza Mondada,

<https://scholar.google.co.jp/citations?hl=ja&user=sdGNw2kAAAAJ>

Soubun.COM「研究者の貢献度を示す「h-index」の調べ方と目安」

<https://www.soubun.com/journal/研究者の貢献度を示す「h-index」の調べ方と目安/>

・ただし、Google Scholar の h-index 等の信頼性等については議論があつてしかるべきである。

(3) Google Scholar で "interaction linguistics" が含まれる「Mondada が第一著者の論文と共著の1章」が、15本あると出てくる。ここで示すのは、

この検索結果を踏まえたものである。例えば、Deppermann とのいくつかの共著でも同様に「会話分析」とセットで言及されている。

(4) 隣接対にはここでの「挨拶 - 挨拶」の他に「質問 - 答え」「要請 - 受諾 / 拒否」のようにさまざまな行為の組み合わせがあるが、本論文によると、「挨拶 - 挨拶」は隣接対の中では例外的に、同時になされるのが望ましい行為のペアであるという。この場面で顧客と店員の挨拶がほぼ同時に行われていることは、客の入店前から店員による可用性の表示がなされた事実とも関連して、サービスの開始部に向けて順調に進行していることを示している。

(5) 2.3の「小括」で触れている柳町の観光案内所のデータでも、カウンターに近づいたインバウンドの観光客が“hi”という挨拶を奥にいる案内所スタッフに向けてあらためて行う場面がある。この事例においても最初の挨拶の時に相互の視線の確立がうまく行われず、スタッフの対応が遅れている。

(6) 原文では「intersubjective dimension of this temporality」(Deppermann et al. 2021:294)とされている。カッコ内は、この部分についての岡田の解釈である。

(7) この点について Deppermann et al. (2021) では Jefferson (1983) の early overlap についての研究が紹介されている。

## 〔文献〕

Deppermann, A., L. Mondada & S. Pekarek Doehler (2021). Early responses: An introduction, *Discourse Processes*, 58: (4): 293-307. doi: 10.1080/0163853X.2021.1877516

Ford, C. & J. Mori (1994). Causal markers in Japanese and English conversations: a cross-linguistic study of interactional grammar. *Pragmatics* 4(1): 31-61. doi: <https://doi.org/10.1075/prag.4.1.03for>

Goodwin, C. (1981). *Conversational Organization: Interaction between Speakers and Hearers*. New York: Academic Press.

Goodwin, M. H. (1980). Processes of mutual monitoring implicated in the production of description sequences. *Sociological Inquiry*, 50: 303-317. doi: 10.1111/soin.1980.50.



- issue-3-4
- Haddington, P., T. Keisanen, L. Mondada, & M. Nevile (Eds.). (2014). *Multiactivity in Social Interaction*. Amsterdam, The Netherlands: John Benjamins.
- Harjunpää, K., L. Mondada, & K. Svinhufvud (2018). The coordinated entry into service encounters in food shops: Managing interactional space, availability, and service during openings. *Research on Language and Social Interaction*, 51(3): 271-291. <https://doi.org/10.1080/08351813.2018.1485231>
- Heritage, J. (1984). *Garfinkel and Ethnomethodology*. Cambridge: Polity Press.
- Iwasaki S. (2015). Collaboratively organized stancetaking in Japanese: Sharing and negotiating stance within the turn constructional unit. *Journal of Pragmatics* 83: 104–119. <https://doi.org/10.1016/j.pragma.2015.04.007>
- Jefferson, G. (1983). Two explorations of the organization of overlapping talk in conversation: Notes on some orderlinesses of overlap onset. *Tilburg Papers in Language and Literature*, 28: 1–28. <https://liso-archives.liso.ucsb.edu/Jefferson/Onset.pdf>
- Kuroshima, S. (2023). When a request turn is segmented: managing the deontic authority via early compliance. *Discourse Studies* 25(1): 114-136.
- Mondada, L. (2018a). Multiple temporalities of language and body in interaction: Challenges for transcribing multimodality. *Research on Language and Social Interaction*, 51(1): 85–106. <https://doi.org/10.1080/08351813.2018.1413878>
- Mondada, L. (2018b). Greetings as a device to find out and establish the language of service encounters in multilingual settings. *Journal of Pragmatics*, 126: 10–28.
- Mondada, L. (2018c). Driving instruction at high speed on a race circuit: Issues in action formation and sequence organization. *International Journal of Applied Linguistics*, 28(2), 304–325. doi: <https://doi.org/10.1111/ijal.12202>
- Mondada, L. (2021). How early can embodied responses be?: Issues in time and sequentiality, *Discourse Processes*, 58(4): 397-418. doi: 10.1080/0163853X.2020.1871561
- Mondada, L. (2024). Between sensorial pleasure and economic reason: Accepting or rejecting offers to taste at the market", Rasmussen, G., T van Leeuwen (Eds.), *Multimodality and Social Interaction in Online and Offline Shopping*, New York, NY: Routledge (pp.44-84).
- Schegloff, E. A. (1968). Sequencing in conversational openings. *American Anthropologist*, 70(6): 1075–1095. doi:10.1525/aa.1968.70.issue-6
- Schegloff, E. A. (1979). Identification and recognition in telephone conversation openings. In G. Psathas (Ed.), *Everyday Language: Studies in Ethnomethodology* (pp. 23–78). New York, NY: Irvington.
- Schegloff, E. A. & H. Sacks (1973). Opening up closings. *Semiotica* 8: 289-327.
- Sidnell, J. (2010). *Conversation Analysis : An introduction*. Malden, MA: Wiley-Blackwell.
- Stevanovic, M. & A. Peräkylä (2012). Deontic authority in interaction: The right to announce, propose, and decide. *Research on Language and Social Interaction*, 45(3): 297-321, doi: 10.1080/08351813.2012.699260
- Tanaka, H. (1999). *Turn-Taking in Japanese Conversation: A Study in Grammar and Interaction*. Amsterdam, The Netherlands: John Benjamins.
- 横森大輔 (2018) 会話分析から言語研究への広がり——相互行為言語学の展開, 平本毅・横森大輔・増田将伸・戸江哲理・城綾美 (編) 会話分析の広がり, ひつじ書房, pp. (63-96).